第６回

薬草だより

ハマスゲの根茎は、香りのよい香附子です。

樋口 剛央*

生薬名：コウブシ（香附子）
薬用となるコウブシの基原植物：
・第十六改正 日本薬局方（2011年）
Cyperus rotundus Linné（カヤツリグサ科）
薬用部位：根茎

ハマスゲ（提供：橋本竹二郎氏）

ハマスゲは本州から沖縄にかけて自生する草丈30～40cmの多年性草本植物です。植物名から浜辺に育つ植物を連想しますが、名前には関係なく、内陸部にも多く見られます。繁殖力が旺盛で、田畑に生えると駆除しにくいことから、薬用植物であるにも関わらず、農家にとってはやっかいな雑草扱いです。幼少期に野原や田畑が遊び場であった人にとっては、このハマスゲに限らず、近縁のカヤツリグサ属の花は、遊び道具であったかもしれません。筆者も小学校低学年の夏休みにまっすぐ40cm程に伸びた花茎を切り取り、逆さにして「熱くない線香花火！」と振り回して遊んだ記憶があります。

肥大した根茎を薬用とし、生薬名を「香附子」といいます。「附子」の文字からは有毒植物として有名なトリカブトを思い起こさせますが、トリカブトはキンポウゲ科の植物なので全く関係はありません。生薬の形態は、長さ約2cm、直径約0.5～1cmの灰褐～灰黒褐色を呈する紡錘形で、質は固く、表面には5～8個の輪節が並び特徴的です。また、生薬名の由来となった特有の芳香があります。

香附子の歴史は古く、中国では『神農本草経』の「中品」に収載されています。日本では正倉院の薬物の1つであり、江戸中期の『和漢三才図会』（1713年）に収載されています。古い時代より自生する植物ではありますが、食経験の記録は認められません。

薬用では単独で使用することはありませんが、気の流れを整える理気薬として、芎帰調血飲第一加減、香蘇散、柴胡疏肝湯、五積散、竹茹温胆湯などに配合されています。

生産地は中国の山東省、河南省、浙江省、四川省や韓国で、市場には日本産はありません。

香附子

＊松浦薬業株式会社